
FIVE

ciro

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FIVE

【Nコード】

N3912Q

【作者名】

c i r o

【あらすじ】

5人の少年（1名性別不明）の高校生活を描いたショートストーリー。

1

4月、港南高校入学式。

開校して以来100年近く男子校だったこの学校は、今年共学へ向けて試験的に女子を入学させた。

「——んだと」

「へえ」

「ちよつと気になるね」

「……………」

基井紺は、入学初日からすでに顔の広さを利用して、新たな情報を仕入れてきた。どこから持ってくるかは知らないが紺の情報は正確で、悪友達もわざわざ出所は聞かない。

「おまえらもつと反応しろよ、女子だぞ女子」

「……………ねみー」

「見てみないと、なんともね」

「……………」

紺は他3名の反応を予想はしていたのか、自分の席の椅子をひいて乱暴に座った。

そして先程から一言も喋らず携帯を操作する、神高タクトに目を向ける。

「おいタクト、おまえの大好きなオナナの話だって」

「誤解を招くようなこと言うな」

「だったらテメー、携帯見せてみるよ。また不特定多数のオナナが相手だろうが」

「俺からは連絡しない、あっちからメール送ってくるんだよ」

「出た、タクトの来る者拒まず。そろそろ刺されるぞ」

そういうオナナは俺に寄ってこないと答えたタクトに呆れて目を離すと、やり取りを聞いていた一夜が「病気持ちになるんじゃない？」と言。綺麗な顔をして中身はかなりの毒舌家だ。

ようやく携帯を学ランのポケットにしまったタクトが会話に加わった。

「オナナねえ。式じゃいなかっただろ」

「1人だけだから、クラスに直接行くらしい」

「1人？」

案の定、タクトと一夜は目を見開いた。

「紺がガセネタ持つてくることはないしね、本当なんだろうけど。ちよつと信じがたいね」

「…ワケありだな絶対」

「ま、でもいんじゃないね。おもしろそうだし」

「その子が港南を卒業できるか賭ける？」

「卒業できないに1万！」

「1ヶ月で転校に1万」

「丈、起きろ！おまえどっちに賭ける？」

「……はあ？」

紺が、机を蹴ってそこに突っ伏して寝ていた矢ヶ崎丈を起こしている、騒がしい教室に男性教師が入ってきた。

生徒たちが席につきざわつきが収まるのを待って、入学を祝う言葉と自己紹介を簡単に済ませた佐倉という担任教師は、「知っているやつもいるだろうが」と話を始めた。

「港南高校は男子校だが、いずれ共学校となることも考えて今年試験的に女子に入学してもらった。クラスはうちになったので今から自己紹介をしてもらう」

途端にざわつき出す生徒たちだったが、それも教室のドアがガラリと開いたところで、水を打ったように静まる。

緩くパーマのかけられた栗色の髪、透きとおるように白い肌、華奢な身体に極めつけは、人形のように整った顔立ち。

チェックのセーラー服を着た少女は、短いスカートから伸びた細い足ですたすと教壇に上ると猫のような勝気な瞳でクラスを見回した。

そしてその美少女は、佐倉が黒板に書いた名前を一瞥すると、自己紹介を始めた。

「都ねねです。こんなナリをしていますが、れっきとした男の子なのでどうぞよろしく」

クラス全員、吹き出したのは言うまでもない。

#2

騒然となったクラスの中で、動揺しなかったのは佐倉だけだった。情報通である紺でさえ目を見開いている。

「と、いうことだ。都はあいてる席教えてもらって座れ！。昼から寮の説明会があるから遅刻すんなよ。以上」

担任であるはずの佐倉は、そう淡々と告げるとさっさと教室を出て行った。

おそらく収集のつかなくなるであろうクラスをまとめるのは困難だと考え放置した教師の、実に清々しい引き際だ。

置いて行かれた男子生徒と、教壇で大きな目を瞬かせる自称男子生徒。

再び静まったクラスで、一番早く動いたのは紺だった。

「ねーねー、都サン。俺の後ろの席あいてんだけど？」

紺は自分の声にこちらを見たねねに、自分の後ろの席を指差す。人懐っこい顔に笑みを浮かべた紺の顔と、誰も座っていない席を交互に見たねねは、逡巡した後、教壇を降りた。

自分の一挙手一投足から目が離せないクラスメイト達に目を向けることなく空席まで来ると、まるでその席が以前から決まった自分の席であるかのように自然な動作で座った。

そして、すかさず椅子に後ろ向きに座り直した紺に声をかける。

「ありがとう。えーっと……」

「紺。基井紺」

「基井くんね」

紺はそのままタクト、一夜、丈のことも順に紹介する。

そして、昼休みになり各々行動し始めた周りを見ながら、昼食に誘う。

しかしねねは緩く首を振り、今日はこのまま帰るからとやんわり断った。

「寮の説明会あるけど？」

「寮じゃないから。部屋が足りなかったみたい」

「へえ」。説明会とかだるいから羨ましい」

ねねは頑張れという言葉を残すと、来た時同様さつさと教室を後にした。

その後ろ姿を、眺める4人。

「さつさと、飯行こ」という丈の台詞に3人は席を立った。

4階にあるクラスから、別棟にある食堂まで歩く。

「で、どうよ？」

そう聞く紺に、タクトは呆れた表情を向けた。

「どうよって、別に。変な奴だとは思っけど、男とか女とかどうでもいいんじゃない？」

「おつまえさー」

「まあ、タクトに変な奴だと思わせただけ、ハーレムの女の子達とは違うんじゃない？」

「ハーレムってなんだよ」

「自覚なし？女の子あれだけ侍らせといて」

「見た感じ、俺は女だと思った。身体とか匂いとか」

丈の言い草に紺は、思わず笑った。

「なんだそれ。てかおまえ寝てたんじゃないんかよ」

「丈って、言ってることは動物的なのに、妙に納得するんだよね」

「確かに」

一夜の言葉に、納得する紺とタクト。

「で？一夜はどうなん」

「俺も、あれだけ綺麗だったらもう性別はどうでもいいかなと思うよ。たぶんどちらにしろ、格好の的にされるのは変わらないだろうし」

「おまえもかよ」

「てかおまえが”綺麗”とか言うത്嫌味にしか聞こえねえ」

「俺も思った」

好き勝手に話しながら、混雑する食堂で昼食を取り、午後から始まる寮の説明会に出席した。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

夜6時も過ぎれば日は沈む。

タクトは暗くなった夜道を待ち合わせの駅まで歩いていった。

午後突然よく一緒にいる女達の一人から連絡があり、夕食に誘われた。年が6つ離れているその女は、タクトの高校の入学祝いをしてくれるのだと言う。

特に用事もなかったため承諾すると、祝われるタクトより女の方が喜んでいた。

そのやり取りを聞いていた紺は「タクトは女子ホイホイだ」と文句を言っていたが、これだけまわりに女がいても結局誰とも付き合っていない。遊びや映画にも行き、食事や買い物をしたり、その中でキスもそれ以上のこともするが、誰とも付き合っていないのだ。

横で喜怒哀楽を表現する彼女たちを見ても、タクトは同じように感じない。

こんなことを言えば、また紺に文句を言われるのだろうか。

親子連れや小学生達で賑わう昼とは打って変わって人気のなくなった夜の公園。その近くを通ると、「離せよっ」という叫び声が聞こえた。

その高い声に聞き覚えがあったタクトは足を止めた。そして暗くて見通しにくい公園の中を見やると、また聞こえる高い声。今度は低い声も微かに聞こえた。どうやら押し問答をしているようだ。

一瞬空を仰いで、諦めたように公園に足を踏み入れる。

公園の奥に進んで行くと、3人の人影が見えた。内二人は近くの高校のブレザータイプの制服を着た男子生徒。そしてもう一人は、ジーンズにTシャツ姿をしていた。髪をポニーテールにはいるが、あの顔は自称男を名乗ったねねだ。男子生徒の一人に片手を捕まれ、その手を振りほどこうと引っ張りながら罵詈雑言を浴びせている。どう見ても痴話喧嘩には見えない。

タクトは溜め息を吐きながら、3人に近づいた。

すると他校の男子生徒が足音に気づき、振り返る。遅れてねねも

タクトに目をやった。「あっ」と言わんばかりに見開かれた瞳で見るねねに、もう一度溜め息を吐きたくなる。

「取り込み中悪いんだけど、そいつに用があるから貸してくれねえかな」

「誰おまえ」

「その奴に用がある奴」

「おまえさ、ふざけてんの？」

「だからさ」

タクトは、ねねの腕を掴んでいる男子生徒の腕を握った。力を込めると男子生徒の顔が強ばりだし、手の拘束が弱くなる。

「そいつに用があるだけだって」

ねねは拘束が緩んだ瞬間、振り払うように手を引き戻した。そして距離を取ると、一層男子生徒を睨みつける。

タクトは男子生徒に「じゃあ」と一言声をかけると、ねねを促して公園を出た。

ねねが付いてきているのを確認すると、ジーンズのポケットから携帯を取り出し、待ち合わせをしていた相手にダイヤルする。ワンコールで出た相手に行けなくなったことのみを伝え、明らかにトーンの下がった声が言う入学祝いはまだ次の機会にという言葉に承諾し、通話を切る。

今度は発信記録を占める名前の一つをコールする。先程の相手と同じくワンコールで出た相手に二言三言話すと電話を切った。

そして自分を呼ぶ声に振り向くと、ねねは分かれ道で立ち止まっていた。

「何」

「助けてくれてありがとう。家こつちだからまた学――」

「あのさ。俺今ので予定がなくなったからちよつと付き合ってくれねえと困るんだけど」

「は？」

「紺に連れてくつてもう言ったから」

「え、ちよつと……！」

助けてもらった手前、断ろうにも断れないねねの手を掴み、元きた道を戻る。

微かな震えを確かに感じながら、「入ってた予定の時間分付き合ってくれたらいい」とさつき掴まれていた手を引っ張って連れて行く。

「飯は？」

「あの人達のせいで食べ損ねた」

思い出したのだろつ。タクトは不機嫌さを隠さないねねの口調に少し笑う。

「じゃあちようどいいかもな。今から行くところ、うまいから」

「どこに行くの？」

そつたずねる声にタクトは振り返って意味深に笑うだけで、何も答えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3912q/>

FIVE

2011年1月27日23時10分発行